

大江島の村の中央、室津道の北沿いに南面して、大江嶋村郷蔵が建つ。一見古くて地味で石碑がなければ通る人は気がつかないかもしれない。郷蔵は、正面妻入りで、東側南北の道に面して二箇所小さな出入口が設けられている。中に入ると直ぐに二つの出入口の間に西向きに階段があり、二階に続く。内部は昔日のままで階段の板は分厚く武骨で、階段は急で段差は大きい。薄暗い中、注意深く歩を進め二階に上がると天井は低いが、歩くのには不自由のない高さはある。古老の話しによると、江戸時代、この二階で年貢米の事務が取られていたそうである。薄暗い灯りの下、一点の間違ひも犯さぬよう根を詰めた姿が浮かんでくるようである。また、二階の奥には、悪事を働いた者を留め置くお仕置き場として格子に囲われた番屋が設けられていたという古老の言い伝えも残っている。外に出て正面を見上げる。上部中央破風に木彫りの懸魚、その奥側に大江島の「大」の紋の木製の浮き彫りが掲げられている。波の上に「大」の字がかたどられた紋は、防火の祈りを込めた懸魚に通じるものがある。最近の改修で木戸がシャッターになってしまったのは、時代の流れであろうか。

向かって右側に西面して、平成十五年五月建立の旧大江嶋村郷蔵の石碑が建つ。(縦 163,5 cm 横 51,5 cm 奥行 20,0 cm 台座高さ 14,5 cm) その碑文には、『郷蔵は「ごぐら」とも呼ばれ 江戸時代に年貢米の保管と凶作に備えて穀物を蓄えるために各村々に造られた共同穀倉で近郊では現在ここだけに残されています 天保九戌年(1838)三月に書かれた大江嶋村明細帳には「郷蔵 桁行四間半 梁行弐間 瓦葺壱ヶ所」とあって現状と一致 堅固な土台土壁や軒瓦紋様にも昔日の面影を偲ぶことができます 明治以降は戸長役場として村の行政所に使われ その後協議所として永く利用されてきました 近年この二階にあった長持の中から延宝七年(1679)の古文書が数多く発見されています』とある。

網干歴史講座会員 和木節子



[旧大江嶋村郷蔵]



[正面上部妻の懸魚]



[旧大江嶋村郷蔵石碑]